川上 高司 ブログ アーカイヴ

2014年

6月10日

忘れられた国家ーイラクの11年目

ウクライナとロシアの問題にヨーロッパとアメリカが関心を寄せている間に、イラクではもはやテロが日常と化している。アンバル地方は ISIS の勢力が拡大しているが、比較的安定していたクルド人が多い北部にもテロは波及しつつある。8 日にはモスルの行政府が襲撃されて州知事があわや拘束されかかったという事態が発生し、騒然となった。

同時にバグダッドでも自爆テロが発生、多くの死傷者を出している。2014 年はまだ半分も過ぎていないというのに、イラクでのテロの犠牲者はすでに 5000 人を超え、もはや誰にもテロを止めることができないような状況に陥っている。オバマ大統領にとってイラクは「終わった戦争」という位置づけなのだろうが、住んでいる者たちにとっては 2003 年以来続いている戦争である。

イラクの不穏さはイラクだけでは解決しない。シリアの内戦が長引けばイラクにも余波が及ぶとシリアが政情不安になったときから懸念していたが、まさにシリア内戦の影響を強く受けているのが今のイラクだろう。

だが、シリアの内戦もまた一向に終わりが見えない。先週行われた大統領選挙ではアサド大統領が選出されて政権にとどまることになった。欧米はその選挙結果に不満を表明しているが、現実問題として今のアサド大統領に代わる指導者がいるのかどうか。さらに選挙で選ばれた指導者を認めないということができないため欧米の反応は中途半端だった。

アメリカは反政府側を支援しているが、その支援をめぐって受ける側の自由シリア軍と不況和音が鳴り響いている。自由シリア軍の司令官は、アメリカ側からの武器はもはやだれの手に渡っているのかまるでわからなくなっており、結局アメリカのまずい支援が軍閥を育ててしまっていると訴えている。アメリカには派閥やイスラム過激派グループの情報がほとんどないというのが実情のようで、アメリカの武器がイスラム過激派の手に渡っている可能性は否定できない。

世界の警察官から降りる。アメリカはそう宣言した。内向きになって世界の紛争から距離を置くのはいいが、そうならば中途半端な支援もやめるべきであろう。そのことをイラクとシリアの内戦に学ぶべきである。

6月12日

イラクー迫り来る脅威

イラク北部の都市モスルを制圧したイスラム過激派 ISIS は、バグダッドを目指して南下を始めた。その途中には油田のあるキルクークがある。マリキ首相は市民に武

器をとってISISと闘うように呼びかけたが、モスル市民の多くが脱出し始めている。

ISIS の残忍さは有名で、なにしろ過激派のアルカイーダですら彼らに比べたら穏健に見えるほどだという。ISIS はシーア派だけでなくキリスト教徒などあらゆる異教徒をターゲットにテロを起こす。

そして ISIS の武装メンバーはアメリカの軍用車両ハンビーに乗り、アメリカの武器を携帯しているところが目撃されている。アメリカのシリアでの反政府側への支援が機能していないことの表れでもあるだろう。

モスルが襲撃を受けたときイラク軍は戦闘をあきらめていち早く霧散したという。11 年もかけてアメリカ軍が指導してきたことがまったく役に立っていないことも証明されてしまった。

イラク政府が危機感を募らせている中、意外なところから支援の声があがった。内戦中のシリア政府は「共通の敵であるテロリストたちに対して共に闘うことができる」と表明した。シリア政府は「外国が支援するテログループへの非難決議と支援国家に対して何らかの行動をとるように国連に要請する」とも述べ、ISIS の問題は国連へと舞台を移す可能性が出てきた。

シリアとしてはここで国際社会の力によって一気に過激派を駆逐したいという思惑があるのだろう。アメリカやヨーロッパ、周辺諸国にとっても ISIS の脅威は看過できない。

特に注目すべきはアメリカの対応だろう。テロとの闘いを継続しているオバマ政権は断固とした態度を取るのか、あるいは距離を置くのか。もし国連が舞台となればアメリカも黙って見ているだけではすまされない。オバマ政権の正念場であろう。

6月14日

バグダッドを目指すISIS - 試されるオバマの外交政策

イラクでの ISIS の進撃が止まらない。モスルからバグダッドを目指して進んでいるが、行く手を阻む者はいない。マリキ首相はアメリカに空爆を要請したがオバマ政権ははねつけたとメディアでは報道されている。ISIS が支配しているのはクルド人の居住地域であるし、大事な油田もある。パキスタンやアフガニスタンのように空爆するわけにはいかない。

その弱腰な態度にかみついているのが共和党タカ派のジョン・マケイン上院議員である。イラクの危機を救うために今こそ軍事介入すべきだとオバマ政権に迫っている。挙げ句の果てに「今の安全保障チームは無能だ。総入れ替えすべき」と好戦的である。

イラクへの介入をめぐって議会は今２つに割れている。先に述べた強硬派のマケイン議員ら介入派と、介入に反対する上院軍事委員会委員長のカール･レビン氏をはじめとする非介入派が意見を戦わせている。非介入派はアメリカはイラクのためにすでに十分血を流したし闘う予算もないと介入に反対している。

さらに、NATO に協力を求めようという意見も飛び出している。NATO も緊急会議を開いて情勢分析はしているが、ラスムセン総長は「NATO はイラクには無関係」とつれない。

イラクの情勢は確かに予断を許さない。ISIS の勢力が拡大すれば、シリアからイラク、イランに至るまで不安定な回廊が生じてしまう。イランは精鋭部隊である革命

軍をイラクとの国境付近へと移動させて来たるべき時に備えつつある。ISIS とイラン革命軍の衝突は最も避けたいシナリオに違いない。

今の危機的状況は、マリキ首相の 2003 年以来続くスンニ派への締め付けに遠因があるとしても、イラクだけでは対応できない状況であることも確かである。オバマ大統領はあらゆる手段を検討し、最良の支援を行うとコメントしているが、果たしてオバマ大統領は内向きな姿勢を転換させ、積極的に関与するだろうか。アメリカの新孤立主義が試されている。

6月20日

イランのプレゼンスの高まりーイラン革命防衛隊イラクへ行く

イラクでの ISIS の拡大に対してオバマ政権は 275 人の派兵を発表した。アメリカ大使館や在留米国人の安全確保のためだと説明しているが、いつも最初の 1 歩は小さい。折しもウイーンではイランとアメリカのバーンズ国務副長官が核問題をめぐって 2 国間協議を開催していた。当然ながらイラク問題が話題に上ったが、両国は軍事的な協力はしないという結論で一致した。だからといって外交や政治の面で協力しないということではないだろう。

イラクでのイランの影響力は大きい。イランにとってみれば ISIS がバグダッドを制圧しイラクを支配することは、この地域におけるシーア派全体の存亡に関わる問題なのである。レバノンのヒズボラからシリア、イラク、イランと繋がるシーア派回廊に住むシーア派全体が ISIS の脅威にさらされている、イランこそが彼らを守らねばならないというのがイランの立場である。

イラン革命防衛隊の司令官はすでにバグダッドに入っており、きたるべき闘争に備えて士気は高い。このいち早く駆けつけるという姿勢こそがイラクのシーア派、とりわけマリキ首相の信頼を裏切らないという証左であり、シリアやヒズボラ、バーレーンのシーア派など各地のシーア派にとっても信頼できる同胞としてイランの存在感は高まるばかりである。

皮肉にもスンニ派の影響力を高めようとしている ISIS の進撃は中東地域のシーア派を結束させることになってしまっている。バグダッドで ISIS とイランのシーア派部隊が衝突すれば、両者とも宗派をかけた闘いであるゆえに始まってしまったらもはや誰にも止められない闘争となる可能性は高い。イランの協力なしにイラク問題は解決しないのである。昨年 9 月以来積み重ねてきたイランとの宥和政策を今こそ最大限に活かすべきである。

6月21日

オバマのジレンマー軍事顧問団の派遣

オバマ大統領は、イラクの不穏な情勢に対して 300 人の軍事顧問団を派遣すると発表した。もっともオバマ政権自体は軍事介入には否定的である。空爆についてもディンプシー統合参謀本部議長は「難しい」と言い切る。アメリカは何をターゲットにするのか、という ISIS の情報がほとんどないのである。目標が定まらない空爆は地元の反感を買い、結局過激派支持を増やすだけである。しかも北部はクルド人自治区であり油田もある。政治的混乱を招く可能性がある。シリア空爆では勢いの強かったリベラル・ホークたちも今回のイラクでは「軍事介入が必要なほどの人道危機はない」

と関心がない。

シリア空爆の是非が問われたとき以上にアメリカ国内での反発は強い。直近の世論調査ではイラク派兵に賛成は１６％、反対は７４％である。軍事介入に賛成するマケイン議員を支持するのは２８％、派兵を否定するオバマ大統領を支持するのは５４％と、国民は二度とイラクに戻りたくないと考えている。今回はオバマ大統領の方針は民意に添っているといえよう。

退役軍人たちもいち早く派兵反対に立ち上がった。派兵反対グループを組織して派兵反対を訴える。ある陸軍退役軍人は「アメリカこそがイラクでの問題の元凶となっている」と厳しく批判している。戦争後遺症に苦しむ退役軍人の父親は「トラウマに苦しむこどもたちに何もしてやれない。イラクのことより苦しむ退役軍人を救済するシステムの確立が先だ」と訴える。当時者たちのイラク戦争はまだ終わらないのである。

だからといってこのまま ISIS が勢力を伸ばせば、いずれシーア派イランとの衝突は避けられない。レバノン、シリア、イラク、イランと続くシーア派回廊に浸食しはじめているスンニ派過激派との衝突は熾烈なものになるに違いない。それは周辺国をも巻き込んで中東全体にも及ぶ可能性がある。

スンニ派の大国サウジアラビアとシーア派の大国であるイランが中心となってこの地域の安定に尽力することが必要なのだろう。アメリカはあくまでその努力を支援する役割にとどまるべきである。

6月30日

イスラム原理主義「ISIS」の国家宣言ー国際社会の縮図のようなイラク

シリアの東部からイラク西部にかけての地域を「イスラム国」とすると ISIS が宣言した。さらに ISIS のリーダーをカリフと戴くとして全イスラム教徒に敬意を払うようにと世界に向かってコメントした。

イラクはまさに混沌として先行きが全く見えない。シーア派は最高指導者のシスターニ師のジハードの呼びかけに結集し、ISIS との衝突に備えているという。かつて米軍にとって強敵であったバグダッド南部のマハディ軍も再結成されているという。マハディ軍はシーア派のムクタク・アル・サドル師が率いるシーア派グループの民兵組織で 2003 年の米軍の侵攻時には米軍に徹底抗戦し、手強い軍として有名となった。彼らはフセイン時代にシーア派ゆえに抑圧されサドル師の元で堪え忍んだ日々を送っている。スンニ派との闘いはまさにジハードとなり、一歩も譲らないだろう。

一方北部のクルド人自治区はやはり強靭な自警組織を持っており、自らの領域をしっかり固めている。おそらく ISIS がこれ以上つけいる隙はないだろう。

マリキ首相は、このイラクの危機に際してロシアから戦闘機とその専門家を呼んで戦闘に備える。プーチン大統領はこれまでイラクの問題にはあまり関与してこなかったが、全面的に支援すると表明した。

さらにシリアのアサド政権は先週、ISIS のイラク内の支配地域を空爆して、全面的な支援の姿勢と ISIS に対しては容赦ない態度で臨むことを示した。マリキ首相は当然ながらこのシリアの空爆を歓迎するとコメントしている。

アメリカは、シリアの反政府グループに支援を拡大し５億ドルの追加支援を行うと表明、シリアの周辺国には 10 億ドルを拠出すると決定した。アメリカは、ISIS に

対抗できるのはシリアの反政府グループである、という認識を持っている。単純に見れば、アメリカもアサド政権も ISIS を殲滅したいという同じ目的を持っていることになる。さらにシリアやイラクを強力に支援しているイランもまた ISIS を叩きたいと考えている。

ISIS の問題はアサド大統領やマリキ首相を追放して別の指導者を立てて解決するほど単純な問題ではなくなってきている。周辺国だけでなくロシアやアメリカがそれぞれの思惑にしたがってプレイヤーとなり、まさに国際社会の縮図のようである。この危機に世界の警察官から降りたアメリカはどう振る舞うのか。イラクへの派兵には国民の７４％が反対している。中間選挙を控えてオバマ政権の外交政策が注目されている。